

書庫の設備

集密書架

可動式書架を動かして資料を取り出します。スペースを節約できるため、固定式の書架に比べて2倍の収蔵能力があります。新館書庫の約半分が集密書架となっています。



消火設備

書庫内の消火設備は、水を用いるスプリンクラーではなく、本館は不活性ガス、新館はハロゲン化物による消火設備を設置しています。

書籍搬送設備

資料を利用者に手渡すカウンターに効率的に届けるため、搬送設備が設けられています。図書や雑誌を載せたトレイが書庫とカウンターの間を行き来します。トレイには、職員が現在位置を確認できるようID番号が付されています。



書庫内の環境

温湿度

書庫内は、温度22℃、湿度55%を目安に、年間を通じて大きな変化がないよう調整しています。新聞のマイクロフィルムなどの保存用ネガフィルムは温度約18℃、湿度約25%のマイクロ保存庫（下の写真）に保管しています。



照明

書庫内の照明は、センサーで自動点灯・消灯し、必要ときだけ点灯します。資料への影響を減らすため、低紫外線タイプの蛍光灯を使用しています。

虫菌害対策

資料を傷める原因となるカビや害虫の発生を防ぐため、空気中の塵埃を取り除く集塵装置の設置、トラップ調査、必要に応じて受け入れ資料の殺虫殺菌処理などを行っています。また、書庫に汚れを持ち込まないよう、靴カバーや粘着マットを使用しているほか、書庫への立入りを制限しています。

| | 床面積 | 書庫面積 | 収蔵能力 |
|----|---------|---------|-------|
| 本館 | 74,911㎡ | 31,968㎡ | 450万冊 |
| 新館 | 72,942㎡ | 45,861㎡ | 750万冊 |

収蔵能力：資料1冊あたりの厚さを3cmとして書架の長さから算出

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

2021.2発行

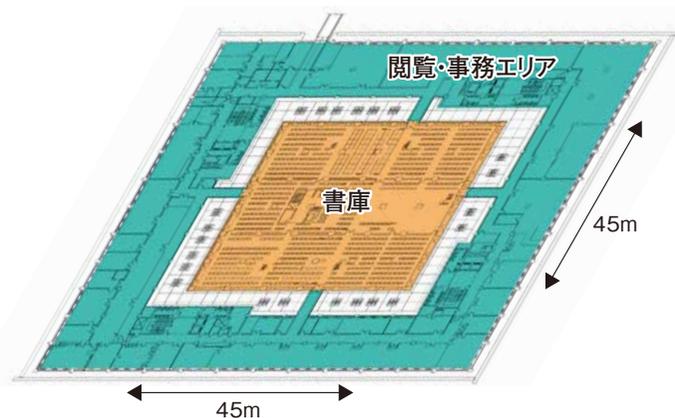


国立国会図書館
東京本館の書庫

本館書庫

中央に位置する書庫

昭和36（1961）年第一期工事が終了し、昭和43（1968）年に竣工しました。1辺45mの正方形で、建物の中央に配置され、その周りを事務棟が取り囲んでいます（図1）。こうした配置は、中央書庫式と呼ばれ、どの事務室からも書庫が近いなどの利点があります。



■図1 本館平面図

17層の書庫

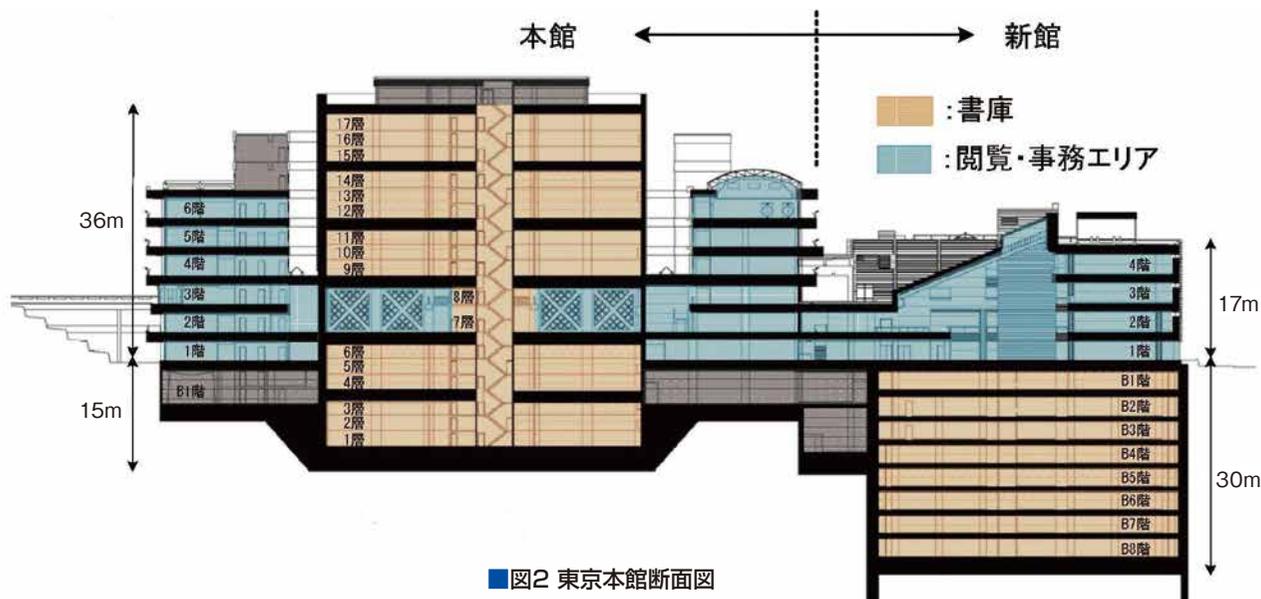
本館の書庫は、17層に分割されています。2階分の高さを鋼鉄の支柱で3層に分割し、各層の天井の高さは1.8～2.3mとなっています。書庫の大部分（6～17層まで）は地上にあり、1～5層までは地下にあります（図2）。



積層構造

限られた空間にできるかぎり多くの資料を収めるため、鋼鉄支柱を用いて書架と鉄板の床を積み重ねた構造（積層構造）となっています（右の写真）。

書架は、床や天井を支える支柱にもなっています。



■図2 東京本館断面図

新館書庫

地下にある書庫

昭和61（1986）年に竣工した新館では、書庫はすべて地下に配置され、東西135m、南北43mの広さで、地下8階（基礎までの深さ約30m）まであります。地下にあることで、年間を通じて外気温の影響が少なく、エネルギー効率のよい建築物となっています。また、地震による揺れが少なく保存環境にも適した環境といえます。地下の外壁と地上1階の床に防水が施されており、地上と地下の両方から浸水を防いでいます。



光庭

地下8階まで自然光が届く光庭（ひかりにわ）が設けられ、地下にある書庫内で働く人の心理的負担を軽減するとともに、停電時の備えにもなっています。（表紙写真）。

貴重書書庫

貴重書を保管するための専用書庫です。急激な温度・湿度の変化を防ぐため、床、壁、天井をヒノキ合板で仕上げています。貴重書書庫は、壁と気密扉で他の部分と仕切られ、埃が入りこみにくいよう気圧を高く保っています。また、他の場所よりも厳格に人の出入りを制限しています。



国立国会図書館は、資料の大部分を書庫に収め、請求に応じて取り出す「閉架式」の利用方法を採用しています。東京本館書庫の書架の総延長距離は、本館と新館をあわせて約412kmで、東京から大阪府までの距離とほぼ同じです。